

真宗文庫

亡き方の声に耳を澄ませて

おぼうさん
—僧侶 30 人のお盆のはなし—



東本願寺出版

はじめに

お盆ぼんの時季じきになると、ご縁があった亡き方のお墓や、お世話になってお寺にお参りする人たちの姿がみられます。また各地で、戦争による死者を追つ甲ちやうし、平和への思いを新たにする行事が行われます。

手を合わせ、亡き方を偲しのぶということは、死を悼いたむとともにその方の声に耳を澄ませ、今を、そしてこれからを生きる私たちにかけられた願いを聞き取っていく営いとなみでもあるのでしよう。

本書は、「亡き方の声」をテーマに30名の僧侶おぼんざんがしたためたお話を収録しています。お盆を迎えるにあたって思い出される近しい方の死、また、戦中を生き方との出あいなど、それぞれの経験から紡つむがれたお話を届けてくださっています。

皆様にとって本書が、亡き方と出あいなおす一冊となることを念じています。

もくじ

- | | | |
|-------------------------|--------|----|
| 1、祖父の死…………… | 清澤 隆信 | 9 |
| 2、お参りされる姿をとおして…………… | 東 美恵子 | 15 |
| 3、水平にであう…………… | 澤面 宣了 | 21 |
| 4、へ心のふるさとへに思いを馳せる時…………… | 丸田 善明 | 27 |
| 5、そっとしておける人…………… | 武田 定光 | 33 |
| 6、教えの伝承…………… | 津垣 慶哉 | 39 |
| 7、「お盆」に思う…………… | 中川 皓三郎 | 45 |
| 8、正午の鐘…………… | 有賀 尚子 | 53 |
| 9、殺しあわなくとも…………… | 池田 勇諦 | 59 |

10、いのちの川―お盆―……………	名畑	崇	65
11、死もまたわれらなり―大切な人を看取る・見送る―…	二階堂行邦		71
12、耳が教えてくれたこと……………	佐々木祐玄		77
13、陽炎の寺……………	松見由美子		85
14、真宗のお盆―ひとつのかたち―……………	廣瀬	惺	89
15、お盆の意義―「その時」に会う―……………	讓	西賢	95
16、浄土からの声……………	荒川美紀子		101
17、人間の問い……………	楠	信生	105
18、巡り来る八月十五日に想うこと……………	兪	漢子	111
19、お盆に思うこと……………	枝川	孝子	117
20、葬儀と結婚式―貴重なご縁をとおして―……………	渡邊	晃純	121

21、	広く大きな世界に出会う……………	藤嶽	明信	127
22、	つながるいのち……………	富永	茂子	133
23、	私が転回されるとき……………	澤田	見	139
24、	胸に残されたもの……………	藤井	眞翔	145
25、	背く私……………	川瀬	智	151
26、	お盆に憶う……………	島津	恵耀	159
27、	新盆を迎える友へ……………	佐藤	和丸	163
28、	先生と私……………	日野	賢之	169
29、	南無阿弥陀仏の声に耳を澄まして……………	常盤	知暁	177
30、	盆太鼓……………	藤谷	知道	185

〈凡例〉

*本文中の「聖典第二版」とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典第二版』を指します。

*本書は、東本願寺出版発行が毎年発行している冊子『お盆』をはじめとする出版物、ラジオ放送原稿等の中から、文章を選定し書籍化したものです。書籍化に際し、一部の文章は、東本願寺出版の責任の下、編集を加えています。

祖父の死

清澤 隆信
きよさわ たかのぶ

「お盆」は、私たちに盛夏の終わりを告げる季節の節目。そして、いのちの旧里との出会いの時。

私の郷里ではひと昔前、海を遊び場所にしていた子供たちは、お盆の頃になると、海坊主にさらわれるからと、親たちに海遊びを止められた。漁師の間でも、底を抜いた柄杓を持ったかと冗談まじりの会話が交わされ、この時をさかいに荒れてくる海を戒めあった。海が、人々の生活の中に溶けこんでいた。

だが今、その海はなくなり、工場群がそこに立ち並んでいる。人々の生きる場所から、心の中から海は遠くに追いやられてしまった。

いつまでもしぶる朝の眠りを、心地よく覚ます蟬の声もこの頃になると、どこか淋しいひびきがこもってくる。そして、夕闇の

中の堤灯ちようちんのゆらめき、さまざまな足音あしおと、それらが私たちの記憶きおくの深みふかから、亡き人たちとの絆きずなをよみがえらせてくるのだ。気忙きせわしい日常の気分のほとぼりが夕風ゆうなまきの中で冷めさ、ひとときの思い出の語かたらいも、お盆がかもす雰囲気ふんいきだろう。

私が祖父そふの死を気にし出したのは、昨年のお盆の頃である。久しぶりに訪れたお墓は、蟬しぐれをあびてポツンと建たっていた。誰もいらない静かさが幼い頃わさなの記憶を呼び起こし、今の私へと糸をたぐり始めた。

私が、小学校三年生の頃だったと思う。母に呼ばれて庫裡くらのもうひとつ奥まったところにある古書院ふるしょいんに、細い廊下ろうかづたいにかけた。胸はただならぬ気配けはいを感じて波うっていた。中庭なかにわの樹々きぎに陽ひの光をさえぎられ、薄暗い部屋には十五、六人の大家族のほ

とんどが座すわったり、立たったりして一つの布ふ団とんをとり囲かこんでいた。

誰たれの目めも一瞬いつしゆんの時ときを見逃みのがすまいと、まばたきもしない。背せの低ひくかった私は、その間あいだから恐おそるおそる祖父そふの顔かほをのぞきこんだ。一ひと息いきあえぐような呼吸こきゅうが続ついた。じっと見つめているうち、私の呼吸こきゅうはいつか祖父そふの呼吸こきゅうといっしょになり、胸むねが苦くるしくなった。いつにない沈黙ちんもくがおそろしさを増まし、私の身みは小刻こきどみに震ふるえていた。思わず目めをそらした時とき、ようすが変わったのを感じかんじた。それが、祖父そふの最期さいごだった。

その後、家族かぞや他の人ひとの死しに出会であったが、どこか祖父そふの死しとは違ちがっていた。それは、祖父そふの死しが特別とくべつであったわけではなく、ただあまりにも自然しぜんな死しであったに過すぎない。

医療器具いりようきぐにとり囲かこまれた死しは、死しそのものものの様相ようそうを失うしない、耐た

え難い^{がた}死の重さをも感じさせなかつた。死は、それが猥雑^{わいざつ}な装い^{よそお}を持たない裸^{はだか}の死であるほど、私たちの「生」への重い問いとなるもの^{もの}のようだ。

私は、どこかに祖父の死をこびりつかせたまま、時には孤独^{こどく}に、時には自暴自棄^{じぼうじき}になっていった。寺を避け^さ家族を避け、海に出て伝馬船^{てんません}を漕ぎ^こ、田植^{たう}えの手伝いをして食事^{しょくじ}をもらい、味噌屋^{みそや}で前掛^{まえか}けをして働いたりした。それは、私の「生」へのいら立ちであつたろう。

祖父が残してくれた手あかのついた仏教書を、いつの時か手にしだしたとき、ようやく祖父の死をしみじみとした感慨^{かんがい}をもって受け入れられるようになったように思う。



お参りされる姿をとおして

東美恵子
あずま み え こ

私がお預かりしているお寺の境内にはお墓がある。毎日お参りされる方や毎月一度お参りされる方など様々だが、お参りが一年で最も多いのはお盆であることに毎年変わりはない。暑い最中にもかかわらず、他府県ナンバーの車や普段見かけない方々もたくさんお参りにこられている。結婚してお寺に住み始めた頃、「お墓って亡くなった人のお骨が納まっているところだし、お墓があるお寺に住んでいるのはこわくないですか？」と尋ねられたことがある。それに対して、私は「生きている人間の方がよっぽどこわいじゃないですか」と、ふと口をついて出てしまったことがあるくらい、私にとってのお墓はこわいものでも、避けたいものでもなかった。

それから二十年ほど経った今では、各々のお墓には自分がお世

話になったたくさんの方々のお骨も納まり、親しみがわくという
と少し違うかもしれないが、「こんな方がいらっしやった」とか
「あの方とはこんなことがあった」とか、懐かしく思い出すこと
もよくある。そして、「お参りに来られている方々は、それぞれ
どんな思いでお参りされているのだろうか」と思うこともある。

数年前に亡くなられたあるおばあさんのことだが、その方が生
前、はくないしよう白内障の手術をされた後にお会いした時、こんなことをおっ
しゃっていた。「よく見えるようになってありがたいのだけど、
こんな残酷なことあらへん。鏡を見て、自分のシワくちなな顔に
一番シヨックを受けたわ。あまり見えへん方が幸せやったかもしれ
へん」と。そして、またそのおばあさんは、若くして突然亡く
なられたお連れ合いの方のお墓に向かって、「こんなシワくちな

なおばあさん知らん、誰や？　って思っへんか。私やで。あんなだけ年をとらへんからずるいわ。ええなあ」と語りかけながらお参りしたのだとおっしゃっていた。その時、私は「言い得て妙」とはこういうことなのだろうかと思ひ、笑いながらいっしょにお話しした時のことを今でも思い出す。

そのおばあさんは、「一人でお墓にお参りするのがこわい」からと、ご近所の方やお孫さんと一緒にお参りされていたことを、亡くなられてから耳にした。そう言われると、たしかにいつも一人ではなかったかもしれないと思ひ返される。「お墓参りをこわい」と思う人が、いつも熱心にお参りされていたことを、私は最初意外に感じた。なぜなら、自分がもし「お墓参りをこわい」と思っていたとしたら、簡単にお参りを済ませて、さっさと帰ろう

とするはずだから。しかし思いなおしてみると、このおばあさんの言っていた「こわい」というのは、もしかすると私の想像とは違っていたのかもしれない。「自分に良くないことが起こるかもしれない」というこわさよりも、「亡き人が自分自身の姿を言い当ててくださる存在」という思いからだったのかもしれない。若くして亡くなられたお連れ合いさんを大切に思う中で、この年まで生かされている自分の姿をも確かめておられたのかもしれないとも思う。

「お盆」がくるたびに、ひたむきに亡き人と向き合い、亡き人との関わりを大切にされていた、このおばあさんの姿を思い出す。